残される「もの」をデザインすること

京都大学名誉教授　**加藤　尚武**

2017年12月に京都で「京都議定書」誕生20周年記念として地球環境京都会議2017（KYOTO＋20）が開催されました。「環境と調和した持続可能な都市文明の構築へ」をテーマに、環境倫理学を唱えられた京都大学名誉教授の加藤尚武先生が基調講演をされました。講演タイトルは、「私たちの中にいる生き物、私たちをとりかこむ生き物――『動植綵絵』から『鳥獣戯画』へさかのぼる」。その中で、老荘思想に「聖人の世に棄材なくして、棄物なし」があるという件があり、「捨てるな」の思想を語った最初の人は、老子・荘子で、この影響を受けて伊藤若冲の絵図は描かれているとのこと。これは今回の「捨てないことからはじめよう！」のテーマに近いのではないかと思い、講演内容から、ストックごみ、現在の廃棄物を取り巻く問題に至るまで、お話をうかがいました。

わたしたちの内に残されていく「もの」

1．聖人の世に棄材なくして、棄物なし

近年爆発的なブームを起こしている伊藤若冲は、幕末の、京都は錦小路に生家をもつ絵師ですが、若冲の作品の中に、いろんな生き物が、いっぱいあっちこっちにいるというのは、すべて生きるに値するのであって、捨てるものと捨てられるものが出てくるのはおかしいという老荘思想が現れているのではないかと思います。元来、江戸時代初期には、儒教の一つである朱子学が大きな影響力をもっていました。この朱子学は自然哲学の体系、万物は一つの気からずっとできあがっていくのだという思想ですが、林羅山が、万物には上下があり、人間社会も上下の身分関係があると唱え、エリート階級を助長したわけです。これに対し、江戸時代末期に老荘思想が浸透し、荻生徂徠の門弟の間で「聖人の世に棄材なくして、棄物なし」という言葉が使われるようになりました。この場合の棄材というのは人材のことを指していると思われます。これはいわば反儒教的思想であり、出来る人間を抜擢し、出来ない人間は貶めていくという儒教型の人材抜擢システムに対し、人間をごみにして捨てて出世している連中はけしからんと。いわば落ちこぼれが合格した人間を恨んだ、恨み言というのが根っこにあるのではないかと思うのですが（笑）、新しいものを取り入れられたときに捨てられるものがあり、捨てられるときに恨みがでるなら、捨てるなという思想がでてきてもいいのではないかと思います。ここに反儒教思想の面白さ、日本文化の根っこがあるんじゃないかと思うんですね。若冲という名前も老荘思想からきていることからも、若冲の作品にはありとあらゆるものを大事にする、そのあらゆるものという感覚が、現れていると思います。その青物問屋の錦市場の陰に大原という生産現場があるわけですよね（図1）。錦市場で野菜を売っている若冲と、大原で野菜の作られるところをみている若冲がちゃんとつながっていて、モノを大事にするということが、彼の作品の中に何らかの形でいつも息づいているということがあったんじゃないかと思います。京都は、若冲みたいな人が育ったところで、今でも、生産地の大原と錦市場は健在で繋がっていて、その面白さがあると思いますね。

図1
現在の大原の野菜畑

2．世代間のつながり

日本の和服は、全部切り取ったものをもういっぺん糸でつないで反物に巻くことができます。洗い張り（図2）をして、細かくほどいた布を全部きれいに元通りにするでしょ。その次に職人に頼むと全部同じ糸でつなぎなおして反物に戻す。私の母も子供の頃は張り板を使って洗い張りをしていた、そういう生活ですよね。

図2
洗い張りの一工程、「洗い」。
専用の洗剤を使ってたわしで手洗いしているところ。
写真撮影：森川信行

そこまで循環レベルを落としていけば、曾おばあちゃんの着物もずっと伝え続けて着られるってことですよね。たとえば、今着ているこのちゃんちゃんこは、姉が私たちのために、糸を後から織り込んで足して、ポケットもつけて作ってくれたものですけど（図３）、おそらく明治の初期か中期の頃の、曾おばあちゃん的な布地が、母親に受け継がれ、捨てるに忍びないからっていって取っておいた。こういうふうにして、一つのものを捨てるのではなくて、作り替えたりして、ずっと維持されていって、曾おばあちゃんとつながっていくということなんですね。モノが繋がっていくだけじゃなくて、人が繋がっていく、曾おばあちゃんの顔をみたことがないんだけれども、曾おばあちゃんからもらったおべべを着て、七五三に行くとか、そういうことで、世代間の生き方や気持ちが伝わるっていうことが結びついている。環境倫理学の言葉でいえば、「世代間のつながり」です。その「世代間のつながり」の厚みというか、深さというか、そうしたものが人間の生き方の中で、ある一種の落ち着きだとか、安心感だとかを作り出しているんです。それは、人間というものがこの世の中に生きてきて、地球全体の歴史からすると、ほんのフラッシュの一瞬にもたとえられない短い期間を生きたとしても、ひとつひとつの人生や生活っていうのは、単に一人のある生きた瞬間ではなくて、大きな命の一部分であるという感じがどこかに伝わっている、どこかにあるということが、生きてきてよかっただとか、満足だったとかという、生きていたことの充足感と深く結びつくのではないかと思うのです。つまり、世代間のつながりの中に自分が生きているという実感があって、それが単にご先祖様の名前を大事にするだとか、お墓を大事にするだとか、家というものに吸収されてしまうのではなくて、ちゃんとした豊かな思い出としてつながっていくような、そういう営みを通して人が豊かになってくると、ものを大事にしていくということにつながるんじゃないかなと思います。それがなくなると、もっと欲しいもっと欲しいって、ハンドバックを７つも８つも買ったりするということになるんじゃないかな（笑）。

図3
曾おばあさんの着物を再利用してお姉さんに
仕立て直されたちゃんちゃんこ

３．ごみ屋敷を生み出す つながりの貧しさ

この辺にもね、ごみ屋敷っていうのはまだ幾つかあって、そのまま中に人が住んでいて、人がほとんど通れないくらいに玄関までのアプローチのところにごみが毎日増え続け、溢れているというような状態があるんですね。でもね、このごみ屋敷で、モノが捨てられないというのも、本当の安心感がないから、どこか、ぷつっと切れちゃう不安があって、ぷつっと切れる不安をつなぎとめるために昔のモノが捨てられないということになるのじゃないかと思うんです。ですから、ごみ屋敷の住人というのは、精神的に問題がある、問題があるけれども、それはいわゆる精神病というような病名でもって指摘できるようなものではなくて、ため込むことが非常に根強い動機になってしまって、どうしても止められないしつこい性質をもっていると思うのです。そういう人たちに対して、一概には何もいえないけれども、もらってもらえるような人間との付き合いがあるのか？と考えれば、喜んでもらってくれる人がいないという人間関係の貧しさが、ごみ屋敷の住人になるのではないか。喜んでもらってくれる人がいるという人間関係から派生する世代間のつながり、一つの人生を大きな生命の一部として感じさせるもの、そういったものがごみ屋敷とは違うものを生み出していくのではないかと思うんです。気持ちの本当の落ち着きを作り出すような世代間関係がしっかりとしているということが、本当の対策ではないかと思うのです。

４．時空間の流れに移すと 捨てることがなくなる

捨てないで片づけることの要諦は「人にものをあげる」です。そのためには、もらってくれる人を開拓するということです。もらってくれる人を開拓することが、身の回りを片づける秘訣である。特に若い世代に引き継いでもらうというのが、最も本来的な用途です。世代はつながっていくわけですから、つながっていく世代という流れに、モノをもう一度移すこと。私という有限な、死んでしまえばなくなってしまうところにストックしてあるモノを、世代という流れの中に、置き換える。そうすれば、このモノはいつまでも使ってもらえる、ということですね。昔の人だったら大体は捨てないで、再利用してもらえるように人にあげています。だから残すのは、美術品等として価値のあるモノを残すのが、一番いいでしょうね。美術品としての価値があれば、文句なしにもらってもらえますし、もらってもらえるモノっていうのは廃棄物にならないですよ。でも、価値はないけれども、金目にならないけれども、もらってもらえるというものもあると思うのです。

５．想い出の品の渡し方

東北大震災で被害にあった同僚の壊れた家に、後片づけのお手伝いに行ったら、出てきたものがみんな思い出の品だったんですね。若い頃、初めてデートしたときに被っていた帽子とかね、捨てられないですよね、そういう思い出の品というのは。私がお勧めしたのは、その家の人は俳句をする人でしたから、全部俳句にしちゃえばいい。もらってもらえない思い出の品は、なるべく保存する負担の少ないように変えていくというのがいいんじゃないかと思いますね。帽子なんかは、詩にしても俳句にしても歌にしてもいいし、そういう芸術作品にすればいい。思い出の品というのは、本来、「物」として残すよりは、「作品」として残されるほうが、想い出の質にふさわしい。だから、コストがかかるから作品にしなさいといっているのではなくて、「想い出」というものをちゃんと掘り下げて考えれば、「物」として残すよりは作品として残すほうが、あなたの気持ちにしっくりと来るんじゃないですかといえるのではないかと思います。

６．文化として残っていくもの

今、日本の文化で一番世界化しているのは何かというと、マンガですね。マンガというのは、木版の出版物が江戸時代に普及していた遺産ですよね。私、京都大学にいたときに、京都大学図書館の地下室の、物置みたいな、古くて使わないような物を置いてあるところで、調査したことがあるんですけど、人気のある作品は、また版を起こして再版されているのです。この間見た浮世絵展では、木版の印刷物の中にタヌキの絵が描いてあって、そこに「たぬき」と平仮名が書いてあるんですけども、文字の大きさがとてもとても小さく「たぬき」って書いてある。どうやって木版でできたのかと思うくらい。

活字印刷というのは、15世紀ごろヨーロッパの文化を同一の規格で同一物を大量に作る文化に転換させました。最初に綿操り機を発明したエリー・ホイットニーという人は、「まるで活字本のようにしてモノを作ることができる」と、宣伝文句に使ったくらいです。だから、活字というものが、ものすごい大量生産の技術の基本になっていたわけです。ところが、日本の場合には、活字にしないで、こんな細かい表現まで全部木版でやっちゃうという、異常な技術があった。おそらく幕末から明治期にかけて木版出版物は世界の活字出版物に匹敵するくらいの量と質をもっていたと思うのです。ということは、活字出版物とは違って、画像と文字を初めから一緒にする技術が開発されてきたわけです。活字技術が画像を排除する出版物を作り出すという方向に行ったのに対し、画像と文字を共存させる木版出版物を維持する文化を日本文化は素地としてもっていたと思うのです。それが今の漫画文化の原型になるのではないかと思います。そういう幕末期までの伝統が、ちゃんと残されて、現代に再現されていると思います。そういった意味では長い生命力をもった「もの」は今でもずっと続いていて、他にもいっぱいあるんじゃないかと思います。

私たちの外に残っていく「もの」

１．現代の廃棄物問題を起こす構造

ローマクラブ第１回報告で石油の枯渇予測がでて、また、あらゆる資源の枯渇予測が2013年ごろたくさんでましたが、実際には枯渇していません。資源情報というのは軍事情報と同じで必ずしも正確な情報が伝わるわけではないのですが、相変わらず、使って捨てる、使って捨てるという産業の体質のほうが持続している。資源をもっている国ともっていない国では、循環型体質を作るか作らないかの利益がずいぶん違います。中国社会が日本のような資源枯渇に直面して廃棄物を少なくするという動機をもつということはあまり考えられない。相変わらず、世界は、資源をもっている大国が大きな影響力をもっているという点からすると、資源問題に取り組む姿勢の強い・弱いの違いというのは、極めて構造的なものではないかと思います。

日本では、廃棄物を最低限にするということが社会的に定着するための、さまざまな政策がちゃんとつながっていません。廃棄物を最小限にするには、世代間の持続性がちゃんと維持できるような、家族の持続構造が維持されていなければならないのに、実際は家族をどんどんぶっ壊していて、物を捨てるなとお叱りをいってもしようがない。家を壊すなといっても、実際に地方の活性化が追いつかないから、家はどうしたって地方で壊れていく一方で、東京で家が建っていく。だから、廃棄物を取り巻く社会政策が全部ちぐはぐな状態の中で、廃棄物問題というものとして浮かび上がってきているのだと思います。

２．家族の持続構造の維持

私は、自分の子供とか孫とか、三世代型とか、そういう生活がちゃんと維持できるというのが政策の基本にならなければならないと思います。実際問題として、単純化していえば、あらゆる人が35歳までに子供を２人以上もつという生活が保証されて、初めて日本文化の持続可能性は保持されるのです。そうでなければ、人口減少社会あるいは極端に高齢者出産の社会が来るとかという危険があるわけです。35歳までに子供を2人もつというのは、私たちの頃には、誰もが当たり前で、それを守れとわざわざいわれなくても自然であったわけですが、現在では、35歳までに子供を2人育てるほどの安定した職業に就くことのできる人というのは、全人口の20％以下だと思います。いわゆる非常勤雇用の増加により、多くの人は35歳ではまだ生活が不安定です。終身雇用制度・年功序列賃金制度の崩壊が、いわば日本の世代間の安定性を崩壊させたわけですが、年功賃金序列制度というのは、お父さんが55歳の定年で退職するときに、子ど

もは20歳で自立するという基本設計でもって出来上がっていた賃金制度です。年功序列賃金制度を壊してもいいけれども、その代わりになるような世代間の安定を保証するような制度が作られてはいないというところに日本社会全体の脆弱化の原因があると思います。

3．消費行動の構造的問題

まだ使えるのにもう捨てる、耐用年数があるにもかかわらず使用年数が少ない、その理由はもっと安くて便利な代替品が手に入ったからというのが大きい。それ以外に、自分に合わなくなったから捨てるというのもあります。次に、時流に合わないからファッションに合わないから廃棄されるという要素が非常に強くなってきています。ヴェブレンという経済学者は、人々は「見え」で消費する要素が非常に強いのだといっています。消費行動というのは、必要だからではなく、また自分が好きだからというのでもなくて他人が評価してくれるからモノを買うという、奢侈的消費だとか、誇示的消費という要素が、消費の中に構造的にあるということを指摘したわけです。だからヴェブレン流にいえば、カッコ悪いから捨てるというのは、りっぱな捨てる理由になりえます。となると、実質的な消費から奢侈的消費に移る度合いが強くなればなるほど、廃棄物の量は増えるという面がどうしても出てこざるをえないのです。

4．地域の過疎化による廃屋の増加

家が廃棄物になるという問題は、昔の大工さんの子どもは大工さん、米屋のこどもは米屋というように、職業選択の自由がなく、長男だけが後継ぎで、次男坊以下は全部家から出て行けという、いわば、家を廃棄物にしない対策としては完璧な対策があったわけですよね。今は、過疎地域というのができていて、最大人口の30%を割ると、たとえば豪雪地帯は、全員が生活できなくなる。冬の雪下ろしというのは、到底、一人ではできないから、危ない家があれば、みんなで雪下ろしをしてやるという、雪下ろし協同組合というような協働体制により、村が維持できていたのが、最大人口の1/3くらいになるともう雪下ろし協働体制が保持できないため、全村離村してしまうというのが、山形県とかであります。大都会化する一方で、地域が過疎化し、過疎人口を高度産業の導入によって活性化するというかつての日本列島改造論でも、今の各地でシリコンバレーを作るという投資が行われても、みんな失敗しています。産業の活性化が失敗すれば、家という廃棄物はいっぱい出てきてしまうわけです。

5．世界廃棄物最小限政策への転機

私たちの産業社会全体が拡大し、成長するという拡大主義から、持続可能性を如何に追及していくかという持続可能性主義に転換していくのだという、そういう大きな見積もりをもったときに、産業社会は拡大社会の中では脇目も振らずに廃棄物をあっちこっちに散らばし、廃棄物になるのを承知でどんどん作っていったという、そういう産業の体質をずっと維持してきて、それが高く評価されてきたわけだけれども、これからはそんなことをすると尻ぬぐいが大変だということから、逆に「廃棄物最小限」ということを最初から産業構造の中に組み込んでいかねばならないということが、一番基本になる転換点だと思います。その基本になる転換点から考えると、どういう家族構成を考えればいいのか、どういう産業構造を考えればいいか、どういう空間デザインや感覚を考えればいいのか、ということが出てくると思いますが、そういったものが、まだ点でばらばらで、全体を系統的に考えるには至っていない状況です。まずは、徐々にその系統をはっきりさせていくということは大事だと思うし、私は、とくにデザイナーがどういう感覚をもつかということがかなり大きいのではないかと思っています。

6．再利用型産業のデザイン

ヨーロッパでは、家具や袋物を古道具屋で丹念に直す再利用が盛んです（図4）。それから、建設業という再利用産業。日本の場合には、建設業というのはほとんどが新築で維持されている産業であるため新築戸数が減ると建設業が傾いてしまう。ところがヨーロッパだと、殆どが再利用建築で維持されているのです。というのは、石造りの壁が2mもあるような教会を壊して建て直すと、

図4　ヨーロッパ調の家具

その壊すコストが非常に高くなるので、石の壁に電線を通すための穴を掘るドリルを開発して、電線だとか給水だとかによって近代化できるように修理して古い建物を作り直すという再利用型産業に建設業が向いているわけですよね。日本では、今度は名古屋城もぶっ壊してコンクリートに直しちゃうとか？要するに、社会全体が廃棄物ゼロに近づいていくというのは、産業が全部再利用型産業に代わっていくということです。ですから、建設業でも、もっと再利用型建設業というのが盛んになってもいいのではないかと思います。壊すほうが安いから壊すという例が多いわけですが、そういうときには、才能のあるデザイナーに図面を引いてもらうだけで、凄くいい再利用ができると思いますね。古いものの良さを生かしてそれを再利用するデザイン感覚がもっともっと開発されなければいけないと思います。古いものを使った良さを十分感じられながら新しい、生活空間の同一性が高いと安心できるという価値観が必要ですね。

7．多様性と共存する統一感の環境デザイン

よく指摘されているのが、飛行場が新しくできると、飛行場へのアプロー

チに、色んなコンビニエンスストアが並ぶ。ところがそれぞれのコンビニエンスストアは、その会社のデザインポリシーをもっていて、隣にどの建物が建つかということは一切無視して企業としてのアイデンティティーを貫く。したがって、飛行場への道に出てくる、新しい素晴らしい建物は全部統一感がない。そういう街づくりが行われてしまう。これ、松原隆一郎さんという経済学者が指摘していることなんです。ヨーロッパでは、例えばアムステルダムは、並んでいる建物は全部ものすごく個性的なのに、個性を主張すると同時に周りと調和することもちゃんと考えていて、それで初めて合格点になるという意識をみんな持っているみたいな感じがしますよね。ドイツのドレスデンは、第2次世界大戦の空爆の後、古い材料が使われているところと新しく継ぎ足したところがはっきりとわかるような形で聖母教会（図5）は2005年に再現されたけれども、エルベ川周辺の景色は完全に復活して、ヨーロッパの最高の景観というものを再現しましたよね。あれも、再現しないで全部新しく建て直したらずっと安くて、レベルの高いものができたかもしれません。日本では保存したら絶対に採算に合わないから、建物を建て直すというふうになると思いますね。だけど、ドレスデンでは、市民らが発起人となり、世界中に再建資金を呼び掛けて、復元されました。壊された建物は廃棄物ではなく、利用可能な資源としての出発点になりました。

図5
ドレスデンの聖母教会。左は1985年、右は2005年。第2次世界大戦のドレスデン大空襲により、崩れ落ちた聖母教会は、ドイツ統一までそのままの形で残されていた。世界最大のジグソーパズルと称されたリコンストラクションは、コンピュータを使用して、およそ3,800個の古い石が再建利用され配置された。黒ずんで見える部分が、オリジナルの部分。
写真左出展： https://de.m.wikipedia.org/wiki/Der_Turm(Tellkamp),
Bundesarchiv, Bild 183-1985-0206-024 Foto: Hiekel, Matthias | 6. Februar 1985

聖母教会の復元というのは、単なるノスタルジーではない、ドレスデンの文化という多様性の一つとして引き継がれ、リコンストラクションされ、残されているんですね。多様性を保持しながら共生できる環境を作る社会全体の功利主義†が考えられているわけです。

今のままの日本では、法人††のみの商品価値が優先される独占資本主義が蔓延れば、自然人††をベースとした多様性社会の豊かさの基盤が失われることになるのではないでしょうか。

9．21世紀のバウハウス

20世紀の初頭に手工業職人と美術アカデミーを一体化したドイツのバウハウスという総合芸術学校が、世界の新しいデザインを作り出す一つの原点になりました。今は違う意味でのバウハウスが必要だと思います。つまり、19世紀初頭に大量生産方式というのが出来上がって、あらゆるものが数値規格で大量生産できるという体制が出来上がると、後、それに見合う形で新しいデザインを設計し、実現化したのがバウハウスだと思います。創設者のヴァルター・グロピウスは、バウハウスにおいて重要だったことは、作られたモノではなく、アイデアを具現化する、今でもなお適用できる、その「方法」なのだと晩年にいっています。今、私たちは持続可能性への転換という時代を迎え、持続可能性への転換にふさわしいバウハウスは、いったいどういうものであるのか。そういったものを追求する課題に取り組んでいいのではないかと思います。

† 功利主義：最大多数の最大幸福をスローガンに、19世紀英国のベンサムやミルによって唱えられた。
†† 自然人と法人：自然人とは、出生から死亡まで等しく完全な権利能力を認められている個人。法人に対する個人。 法人とは、自然人以外で、法律上の権利義務の主体となることができるもの。一定の目的の下に結合した人の集団あるいは財産についてその資格が認められる。

プロフィール
1937年、東京生まれ。東京大学文学部哲学科を卒業。山形大学、東北大学文学部、千葉大学、東京大学医学部等歴任。京都大学名誉教授、公立鳥取環境大学名誉学長（初代学長）。現在、人間総合科学大学特任教授、ホモ・コントリビューエンス研究所長。専門は、ヘーゲル哲学、環境倫理学、生命倫理学。1980年に生命倫理学を日本に導入した。主な著書に、『ヘーゲル哲学の形成と原理』(未來社)『バイオエシックスとは何か』（未來社）、『環境倫理学のすすめ』（丸善ライブラリー）、『資源クライシス だれがその持続可能性を維持するのか？』（丸善）、『加藤尚武著作集』（未來社）等多数。